

# 近代中国とマルクス主義との出会いについて

——とくに辛亥革命前後を中心として——

清 水 稔

〔抄 録〕

小論の目的は、欧米の近代社会に誕生した社会主義の諸学説が清末民初の中国に伝播するなかで、その学説の一つ、後に中国共産党の思想的基盤となるマルクス主義の学説がどのような形で紹介され、受けとめられていったのかを、辛亥革命前後を中心に検証することにある。とくに梁啓超・孫文・朱執信・江亢虎・劉師復らの社会主義に対する考え方をふまえながら、彼らのマルクス主義のとらえ方を明らかにした。ただ彼らにとってマルクスの学説はあくまでの彼らの思想を構成する一要素にすぎなかったし、マルクス主義を体系として受けとめようとしたものではなかった。

キーワード 社会主義、マルクス主義、孫文、江亢虎、劉師復

## (1)

清末は欧米近代に誕生した変革の思想が大量に流入した時代である。とりわけ20世紀初頭に活躍した孫文らブルジョア革命派は、それらのなかから変革の思想的武器として、西欧近代社会の枠組を形作ったルソーやモンテスキューらのブルジョア民主主義の思想をはじめ、プロレタリアート解放のための理論となったさまざまな社会主義の思想までも貪欲に吸収し、辛亥革命を勝利に導いた。この民主主義の思想も社会主義の思想も、その流入の初期においては、多くは近代日本の明治を通して受容されたものである。当時の中国人にあっては、日本語から移入された新しい言葉（欧米文献から翻訳された日本漢語）は——社会・国家・国民・自由・平等・権利という言葉（新漢語）はもちろんのこと、社会主義という言葉も——聞き慣れない言葉であり、何はともあれ、その言葉の解釈から考えなければならなかった<sup>(1)</sup>。例えば社会主義という言葉にはさまざまなニュアンスが含まれる。マルクス主義もあれば、国家社会主義・社会民主主義・キリスト教社会主義もあり、またアナキズム・ニヒリズムもそれに含まれていた。つまり当時の社会主義の概念には客観的であれ主観的であれ、資本主義の弊害を克服することをめざした総ての主義・主張が、内包された概念として認識されていたのである。

小論は、社会主義の諸学説のなかにあつて、その後の中国共産党の思想的基盤となったマルクスの学説が、近代中国社会にはじめて登場し紹介された経緯を明らかにすることにある。なお中国においてマルクス主義の学説が本格的にしかも体系的に受容されはじめたのは、ロシア十一月革命以後、五四運動期になってからである<sup>(2)</sup>。

## (2)

1840年代に誕生したマルクス主義は、19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米社会を席卷し、社会主義による革命運動の潮流が資本主義社会全体を大きく揺り動かした。当時の中国（清朝）は、日清戦争の敗北ついで義和団運動に対する八か国連合軍の鎮圧を契機に、帝国主義諸列強による植民地化の危機に直面していた。一方専制王朝の圧制に対する民衆の闘いを背景に、孫文らによる清朝打倒の革命運動が大きくなるとなりはじめていた。マルクスの学説は社会主義の諸学説とともに、まさにこのような歴史的条件のもとで受けとめられた。

ところで中国の出版物においてマルクスの学説がもっとも早く登場したのは、1899年2月から5月の『万国公報』<sup>(3)</sup>第121-124冊上に連載された「大同学」<sup>(4)</sup>のなかにおいてである。文中では2箇所マルクス（馬客恩）と資本の記述がある<sup>(5)</sup>。この「大同学」は、イギリスの社会哲学者ベンジャミン＝キッド（企徳）の著した Social Evolution（1894年、ロンドン）の一部をアメリカ人宣教師ティモシー＝リチャード（李提摩太）が中国語訳したものである<sup>(6)</sup>が、それには自説も書き加えられた。リチャードは、どの国にも立国の宗教があるとの考えに立ち、翻訳を通して生命の起源と生物の進化、教会と科学、神学と自然科学の矛盾点と対立点を明示し、宗教（キリスト教）が与える影響を自然科学よりも高く評価した。彼はマルクスと資本について、一見正しく翻訳しているかのようにみえるが、全文からみると必ずしもそうなっているわけではない。リチャードは、マルクスと資本の問題を紹介しようとしたのではなく、キッドの言葉をかり、国家・民族と階級間の競争、労働者の資本家に対する闘争について、自然界における生物の生存競争の法則から論証し、それが人類社会の発展の法則である、と説くことにあつた。その結果として互いに競争すれば互いに進化する、人は競争がなければ代をおうごとに衰退する、現にイギリスは競争心が他国より優っていたからこそ五大陸を制覇できた、という。リチャードは、キッドの翻訳「大同学」を通して、社会進化論と植民地主義を大いに宣伝したのである。

一方リチャードはこういいながらも、民衆の貧困を救済せんとする学派としてマルクス（馬客恩）・ヘンリー＝ジョージ（爵而治）やフェビアン協会（法便社会主義）等の学説をあげ、それは大綱において的を射たもので、今日でも論駁のしようがない、という。しかし彼は、マルクスの学説と他の学説を渾然一体のものとしてとらえ、なおかつ彼らの考え方を肯定的にとらえたわけではなかった。リチャードは語る。今もっとも心を痛めるべきことは、例えこの世

にこのうえもない妙案があったとしても、貧困を救済し生活の安定をはかる道筋を体験し理解できた人が一人もないことである、もし妙案をもって救済できなければ、その結果は想像するに耐えないものとなろう、どのような道を歩めば、人類を滅亡の淵から救済できるのか、と。これに対し彼はこう自答する。教会の戒律こそが世の中や人の心を互いに繋ぐことができる、教会があってこそこの世を救済し、人の心を匡すことになるのだ、と。リチャードは「大同学」を通して、キリスト教による救世を宣揚したのである。

ついでマルクスの学説を紹介したのは、おもに国外に亡命していた立憲派（変法派・保皇派）や革命派の人々であった。20世紀初頭彼らは、国外で多くの出版物を刊行し、西欧のブルジョア的な政治・経済学説や物質文明の優越性を宣伝し、さまざまな社会主義思想（そのなかにはマルクス主義も含まれる）を紹介した。しかし彼らの間では社会主義に対する見方に違いがあった。例えば社会革命に関する『新民叢報』と『民報』との論戦（後述）のなかで明らかなように、立憲派は社会主義や革命に反対し、革命派はそれを好意的に受けとめていた。

梁啓超は、近代中国において大きな影響力をもった立憲派の立場にたつ学者であり、政治家であり、ジャーナリストであった。戊戌の新政が西太后ら守旧派に弾圧された後、日本に亡命、横浜で『清議報』や『新民叢報』等を創刊、それらを通じて西欧近代の思想や学術文化、政治制度等を大量に紹介し論評を加えた。彼の諸論考のなかには、マルクスとその学説について述べたものも多く存在する。例えば「進化論革命者<sup>キッド</sup>頡徳之学説」<sup>(7)</sup>において、キッド（頡徳）の社会進化論を紹介するなかで、「マルクス（麥客士）はゲルマンの人で社会主義の第一人者である」とか、「今のドイツで最も有力な二大思潮は、一つはマルクスの社会主義であり、一つはニーチェ（尼志埃）の個人主義である。マルクスは、今日の社会の弊害について、多数の弱者が少数の強者に抑圧されていることだといっている。その主張には論拠があるが、その目的は現在にあるのであって、けっして未来にあるわけではない」と述べる。また「二十世紀之巨靈託辣斯」<sup>(8)</sup>の一文のなかでは、「マルクスは社会主義の開祖、ドイツ人で著作がとても多い」と紹介する。また「中国之社会主義」<sup>(9)</sup>の論考において、社会主義（マルクス主義を含めて）を中国古代の井田法と立脚点を同じくするものだと解釈し、次のように語る。「社会主義はここ百年来の世界の産物であり、その要点をまとめれば、土地と資本を公有とし、労働力を商品価値の源泉とするということになる。マルクスは、今の経済社会が実は少数者が多数の人の土地を奪ってつくられたものであると説明する」と。

1902年から1903年にかけて、保皇派の出版社である広智書局<sup>(10)</sup>が、社会主義の学説を紹介する書籍を数多く出版した。例えば、趙必振訳『近世社会主義』（福井準造、有斐閣、1899）・同前訳『社会改良論』（島井満都夫、静修館、1900）・羅大維訳『社会主義』（村井知至、労働新聞社、1899）・周子高訳『社会党』（西川光二郎、内外出版協会、1901）<sup>(11)</sup>等がそれである。そのなかでもとくに福井の著作は、本文だけで五百頁をこえる大作で、欧米各国の社会主義政党的活動状況、社会主義者の生涯や著作・学説等について詳細に述べている。その翻訳書<sup>(12)</sup>

の第2編〈第二期之社会主義——<sup>ドイツ</sup>德意志之社会主義〉第1章〈<sup>カール＝マルクス</sup>加陸馬陸科斯及其主義〉では、カール＝マルクスの生涯とその学説を丁寧に紹介し、マルクスを「一代の偉人」「新社会主義の創立者」と讃え、その著作『共産党宣言』（エンゲルスとの共著、1848年2月）を「一大雄編」、『資本論』（第1巻初版、1867年7月）を「一代の大著述」と顕彰している。出版史の著名な研究者張静廬氏は、福井のこの翻訳書が中国でマルクスの学説をもっとも早く紹介した著作である、と指摘する<sup>(13)</sup>。

1906年以後になると、梁啓超は『新民叢報』を舞台に、革命派の『民報』と社会革命に関する論戦を展開し、そのなかで孫文ら革命派の社会革命を社会主義のなかの極端な土地国有論であると論断し、公然と社会主義に反対した。彼は、革命派が社会主義を全く理解しないまま濫用し、これを利用して下層社会の人々の同情をかい、彼らを煽動して暴動を起こさせることである、マルクス（馬客）やベーベル（比比兒）らの主張する社会革命を今の中国で起こさせてはならない、実行するならば千数百年後のことだ、と批判した<sup>(14)</sup>。

### （3）

もっとも早くマルクス主義の学説にふれたのは孫文であった。1895年10月広州蜂起に失敗して、ホノルル・サンフランシスコ・ニューヨーク・ロンドンと海外で流浪の生活を余儀なくされた彼は、そのなかで欧米各国の社会や政治・経済をつぶさに観察し、とりわけ社会主義の学説や革命運動にきわめて大きな関心をはらった。宋慶齡の回想によれば、孫文は欧州の留学生に対し『資本論』や『共産党宣言』を研究したり、また当時の社会主義に関する書籍を読むよう促していた<sup>(15)</sup>、という。1906年12月『民報』発刊一周年記念集会で講演した孫文は、そのなかで民生主義・社会問題・社会革命を説明しながら欧米における社会主義の内実を紹介する<sup>(16)</sup>。当時の孫文の民生主義は、馮自由・朱執信らがその論考で指摘しているように「日本で社会主義と訳される Socialism」のこととして理解されていた<sup>(17)</sup>。『民報』上でも、社会主義に関するいろいろな学説を紹介する論考や訳文が掲載された。例えば第4号（1906年4月24日）の「欧美社会革命運動之種類及評論」（民報社員訳、宮崎民蔵稿からの翻訳）では、カール＝マルクス（カマ）・エンゲルス（殷傑）らの社会主義論、バクーニン（巴枯寧）・クロポトキン（克羅波多卿）らのアナキズム論、ヘンリー＝ジョージ（軒利佐治）らの土地均所有論を取り上げ、その異同を分析している。第5号（1906年6月26日）の「万国社会党大会略史」（宋教仁訳、『社会主義研究』第1号所載の大杉栄論文からの翻訳）では、マルクス（馬爾克）の『共産党宣言』を紹介し、第一・第二インターナショナル（万国労働者同盟）の歴史を概観している。第7号（1906年9月5日）の「社会主義史大綱」（廖仲愷訳、ブリスの A Handbook of Socialism の翻訳）では、フランス革命以後の欧州における社会主義の発展を概述し、『共産党宣言』を政治的革命的社會主義の爆発点としてとらえた。また同号の「無政府党与革命党

之説明」(葉夏声訳、何を翻訳したか不明)でも、アナキズムと社会主義の異同、マルク主義とアナキズムの闘争を論述し、『共産党宣言』の十大綱領や第一・第二インターナショナルにおけるマルクス(馬爾克)の役割を紹介している。こうした社会主義やマルクス主義に関する翻訳を通して革命派は、社会主義にはいろいろある、川の源は異なるけれども流れ注ぐ海は同じ、ともに人類社会のなかに平等・博愛・人道の大義をうちたてることを目指すもの、ただいかなる方法で目的を達成するかが違うだけである<sup>(18)</sup>、と考えていた。したがって彼らのマルクス主義に対する理解もまたこの延長線上にあった。

『民報』誌上における社会主義ないし民生主義の宣伝は、なによりもまず立憲派・『新民叢報』の革命反対、社会主義反対に対する論戦のなかで展開され、革命派は、社会革命を不可避とする革命の綱領を擁護するために社会主義の旗を掲げた。ほとんど毎号にわたって社会主義関係の翻訳稿が掲載されたが、多くは「投稿」であったことからわかるように、かかる論戦を除けば、『民報』誌上において社会主義の学説が理解され重視されていたとはいいがたい。

しかし革命派のなかには社会主義一般についての関心は相対的に高まりつつあった。そのなかでマルクス主義に関するまとまった紹介が『民報』第2号(1905年11月26日)・3号(1906年4月5日)に掲載された。それは朱執信の執筆による「<sup>ドイツ</sup>徳意志社会革命家小伝」「徳意志社会革命家列伝」である。そのなかで比較的詳しくマルクス(馬爾克)とラサール(拉薩爾)の生涯とその学説を紹介する。彼のこの論考について、それは当時の一部の革命左派がマルクス主義を用いて中国革命の諸問題の解決をはかろうとした表れだ、という指摘もあるが、それは評価しすぎだといえる。朱執信は、確かにマルクスの果たした役割や功績を称揚した。例えば、当時「社会主義を語り資本主義を攻撃するものはいくらでもいた」が、ただマルクスだけが「資本主義の害毒のよってきたるところを述べた」とか、『共産党宣言』はマルクス最大の「功業」であるとかの指摘、宣言や『資本論』の紹介、とりわけ資本主義社会の弊害に関する具体的な解決策を述べた十カ条(宣言第2章末尾にある)の翻訳(これは『共産党宣言』の中国における最も早い抄訳<sup>(19)</sup>)等からもうかがえる。しかし朱執信は、マルクスの学説の総てを評価していたわけではないし、一方ではラサールの社会主義思想と彼の実践力を称賛していた。これは彼のマルクス主義に対する理解の一端を表している。

また朱執信はドイツ革命のなかから何を学ぶべきかについて、先の「徳意志社会革命家小伝」緒言のなかで次のように語る。「要するに社会運動はドイツがもっとも盛んであり、その勝利と失敗の足跡は手本とするに足るものが多い。その功績は実にマルクス・ラサール・ベール(必卑爾)らにある。ゆえに僭越ではあるが、我が同胞に彼らを紹介したい。期するところは彼らの学説や生涯を我が国の人々の脳裏に広く行き渡らせること、そうすることによって社会革命に資することを願うものである」と。さらに彼は、「社会革命はまさに政治革命と併行しなければならない。これは我が中国の革命のためにもっとも留意せねばならないことだ」と考えた。このいわゆる社会革命と政治革命の関係について論ずることは、当時一つの流行と

もいえるほど活発であった。例えば胡漢民の『民報』之六大主義（『民報』第3号、1906年4月5日）、馮自由の「録中国日報民生主義与中国政治革命之前途」（『民報』第4号、1906年4月24日）、孫文の『民報』発刊一周年記念集会の演説（『民報』第10号、1906年12月20日）等はいかか風潮のなかで書かれたものである。当時の社会革命とは、孫文ら革命派の解釈によれば、民生主義を実行することであった。それは、資本主義の発展による弊害や貧富の格差を未然に防止し、労働大衆の貧困生活に同情するという、彼らの主観的願望の産物であり、その問題解決の方法も、地価を定めて現在の地価以上に騰貴した部分を国家に納めるというヘンリー＝ジョージの「単税法」に基づく土地国有論や、ビスマルクのドイツや日本の明治政府が採用した「国家社会主義」論であった。したがって朱執信は、マルクス主義によって中国の問題を解決しようとしていたわけではなかった。マルクスの学説を社会主義諸学説の一つとしてとらえ、中国の社会革命に生かそうとしていたにすぎなかった。

つぎに辛亥革命前夜にマルクスの学説を紹介した初期のアナキストについてふれておく。当時彼らは、マルクス主義に対して敵対的であったわけではない。例えば劉師培・何震夫妻の編集した『天義』の第15冊（1908年1月15日）にエンゲルス（因格爾斯）が1888年1月ロンドンで『共産党宣言』に書いた英文の序文の中国語訳「序言」（民鳴訳）が、第16-19合冊（1908年1月？）に『共産党宣言』第1章〈ブルジョアとプロレタリア〉の中国語訳「紳士と平民」（民鳴訳）<sup>(20)</sup>とエンゲルス『家族・私有財産および国家の起源』第2章〈家族〉の一節の抄訳（志達「女子問題研究」のなかで）がそれぞれ掲載された。これより先1907年6月、李石曾・呉稚暉らがパリで創刊した週刊『新世紀』誌上では、マルクスやレーニンによって高く評価されたパリコンミュン（巴黎公民）を論評したり（第1号）、あるいはドイツ社会民主党の主導のもとでアナキズムを排除した第2インターナショナル（万国公聚会・万国労働会）1907年大会における各会派の戦争と平和に関する論戦を詳述したり（第14-15号）、また「新世紀（本週世界之記念日）」欄にはアナキストの活動の他にマルクスやエンゲルスをはじめ各国の社会運動家の生卒年や各国の革命党の動向を登載した（第25-63号）。

アナキズムとマルクス主義は根本的に対立するものであるのに、中国初期のアナキストは、なぜ自らの刊行物のなかでマルクスの学説を紹介したのであろうか。一つは、当時の中国にあっては社会主義の諸学説に対する理解が比較的浅薄であったこと、革命の主要な目標が清朝打倒にあったことにより、アナキズムとマルクス主義の矛盾がまだ明確に露呈していなかったことによる。この状況はヨーロッパにおける初期の共産主義運動と類似している。バクーニンが『共産党宣言』をロシア語訳したことも、ついで中国初期のアナキストがマルクスやエンゲルスの著作を中国語訳したことも、何らおかしいことではなかった。二つには、初期のアナキストはマルクス主義の総ての観点に反対したわけではない。劉師培らは、社会主義の各会派に相違はあるが、多くの共通点もある、バクーニンがマルクスに排斥されてアナキズムと社会主義に分離したけれども、社会主義とアナキズムは表裏の関係にある、と考えていた<sup>(21)</sup>。アナキ

ストがマルクスの学説を紹介したのはこうした歴史的条件のもとにおいてである。当然のことながら革命闘争が深まるなかで、アナキストは公然とマルクス主義に反対する立場にたった。

すでに見てきたように辛亥革命以前から、変革の思想としてすでにマルクスの学説が断片的に紹介されてきた。とりわけ孫文ら革命派をはじめ先進的な知識人たちは、王朝体制を打倒して欧米のようなブルジョア共和制の国家建設をつよく求める一方で、資本主義社会の弊害、とくに貧富の格差や勤労大衆の貧困に大きな懸念を抱いていた。したがって彼らは、マルクス主義を含む社会主義の諸学説のなかから、弊害を予防するためのさまざまな政治的エキスを吸収して社会革命を推進しようとした。ブルジョア的立場にたつ彼らの、マルクス主義に対する理解はきわめて部分的で浅く、しかも彼らはマルクス主義によって中国の革命問題を解決しようとしていたわけではなかった。

#### (4)

辛亥革命によって共和の体制が誕生したことで、社会主義の諸学説の紹介や議論が活発となった。孫文は「清朝皇帝の退位と中華民国の成立により民族主義と民権主義がともに実現し、当面の急務が民生主義の実行にある」<sup>(22)</sup>と認識し、また孫文も彼のブレーンも民生主義と社会主義を同義語としてとらえた<sup>(23)</sup>。孫文は、臨時大総統に選出された翌日(1911年12月30日)、社会党本部長江亢虎との会見のなかで、自分は完全な社会主義者であり、社会主義の発展に力を尽くす、と語るとともに、社会主義を広く宣伝し、その理論を全国の人々に普及させることを表明した。この時江亢虎は、孫文の民生主義や平均地権の考え方が我が社会党の宗旨と全く同じだ、と述べ、孫文を指導者と仰ぎ、その政策を支持した<sup>(24)</sup>。社会党は、日本留学や英独仏等の歴訪経験を有する江亢虎が上海で立ち上げた社会主義研究会を改組して、1911年11月5日に誕生した政党である。江亢虎は無宗教・無国家・無家庭の三無主義を提唱し、党はその政策綱領として①共和賛成、②種族融和、③法律改良・個人尊重、④世襲財産制度廃止、⑤公共機関の組織・平民教育の普及、⑥生産事業の振興・労働の奨励、⑦地税の専収、⑧軍備の制限を掲げ、1912年末には各地に490余の支部と52万余りの党員を擁した<sup>(25)</sup>という。時に、中華民国の成立とともに結成された政党は300にのぼり、社会党もその一つであった。当然のことながら臨時約法のもとで議会で多数を占めることをめざした。孫文は、かかる社会党の政策や活動に対する支援を表明、中国の社会党が欧米の社会党のように強力な政党組織となり、政治上のイニシアチブをとってその社会主義政策を実行するよう期待した<sup>(26)</sup>。孫文は、臨時大総統の職を辞してからも、全国各地で民生主義と社会革命に関する講演を展開した<sup>(27)</sup>。その一つ、1912年4月1日南京同盟会会員による送別の席で、孫文は「民生主義と社会革命」と題する講演<sup>(28)</sup>を行い、「今後我々が力を尽くさねばならないのは民生主義である」と明確に述べ、民生主義の実現にむけての革命方策を熱く語った。その概略をたどってみる。

社会革命は全世界で提唱されているが、中国人の多くはまだこのことに考え及んでいない。中国の改造とは、欧米諸国と肩を並べるような強国にすることだという人達がいるが、実はそうではない。欧米では貧富の階級の懸隔がきわめて大きく、少数の資本家のみが幸福を享受し、大多数の労働者が貧苦に喘いでいる状況にあり、社会革命は不可避である。

中国では、文明の程度が低く商工業が未発達なので、社会革命はきわめて困難だという人達がいる。この話は間違っている。資本家が出現し、障害物ができあがっている欧米では、社会革命は武力を用いなければならないが、資本家の存在しない、人民の程度の低い中国では、武力による社会革命を必要としない。

中国における社会革命は、平均地権を実施することで七、八割方成功したことになる。すなわち土地に対して申告価格を基準に課税することで、交通・商工業・文明の発達に伴う地価高騰分を国家に収納して社会全体に還元することができる。地価の過小申告の発生の危険性に対しては、国家による優先取買権を設定して防止する。国家が大きな実業を興そうとして資本の調達に困る場合は、外債を積極的に導入すべきである。外債を非生産的の事業に用いることは有害であるが、生産的な事業のためであれば、かえって有益となる。

アメリカの発展、日本等の勃興はみな外債の力によるところが大きい。外債の利用によって生産性を高め、労働者に仕事を与えて富国を実現することができる。

資本家の出現に対する対処であるが、国家の富強をはかる一方で、資本家の独占を防止するために、ドイツのように国家社会主義政策を採用し、鉄道・電気・水道等の国家の一大事業を国有にすることが必要である。

中国の有利な点は、田畑・宅地を除いて総ての山林・鉱山が国有となっていることである。20万里の鉄道を建設すれば、地稅・鉄道収入・鉱山賃貸料によって国家収入は飛躍的に増加する。これを義務教育費・養老年金・子女養育費等に支出することで欧米を越えた理想社会を実現することができる。

この演説に示された孫文の論調は、その後の各地の講演でも基本的に変わることはなかった。またこの演説の一部は、「中国の次のステップにむけて」あるいは「中国革命の社会的意義について」と題して仏語や英語・露語に翻訳され、国外の新聞に掲載された。ベルギー・ブリュッセルの労働党機関紙 フーブル Le Peuple 7月11日号、アメリカ・ニューヨークの インディペンデント The Independent 7月13日号、ロシアのボルシェヴィキ機関誌 ネフスカヤ Звезда ズヴェズダ 第17期（7月15日）等がそれぞれある<sup>(29)</sup>。レーニンも ネフスカヤ Звезда 第17期誌上に「中国の民主主義とナロードニキ主義」と題する一文<sup>(30)</sup>を草し、孫文およびその綱領について、

戦闘的な真の民主主義が孫文の綱領の行間にしみこんでいる。「人種」的革命の不十分さにたいする完全な理解。非政治主義、もしくはすこしでも政治的自由を軽視したり、また中国専制政治と中国の「社会改革」、中国の憲法改正などが両立するという思想をすこしでもうけいれるという考え方は、一滴もない。共和制の要求をもった完全な民主主義。大



衆の生活状態、大衆の闘争にかんする率直な問題提起、勤労者と被搾取階級にたいするあつひ同情、彼らのただしさ、彼らの力に対する信頼。

がある、と評価し、彼ら中国の民主主義者を主観的社会主義者ととらえた。さらに孫文らの「戦闘的民主主義のイデオロギーは、第一には社会主義的夢想、中国には資本主義の道を避けて資本主義を予防したいという希望、第二には根本的な土地改革の計画および宣伝、と結びついている」とし、その必然的な結果として「不動産だけのすべての法的基礎を変更する綱領、封建的搾取だけを廃止する綱領」が誕生した、と分析した<sup>(31)</sup>。

孫文は、講演のなかで「国家社会主義」政策について繰り返し語る。彼は「民生主義とは少数の資本家を排斥し、大衆すべてに生産の自由を享受させることである。したがって民生主義は国家社会主義である」<sup>(32)</sup>と。孫文のかかる政策に基づく工業の国有化は、現行の共和制のもとにあつては、まぎれもなく資本主義的性格を有するものであり、それは土地政策と同様に、勤労大衆に対する心からの同情、彼らの圧迫者と搾取者に対するもっとも激しい憎悪と、資本主義の弊害を避けるという主観的社会主義とが結びついたものである。

孫文の平均地権<sup>(33)</sup>の思想は、ヘンリー＝ジョージの単税論にその淵源があるといわれる<sup>(34)</sup>が、マルクス主義の痕跡をいくらか残している。その一端を1912年10月に上海の社会党本部の要請をうけて行った講演<sup>(35)</sup>のなかから垣間見ておく。この講演では、ヨーロッパにおける社会主義の誕生の歴史的背景をふまえて社会主義の神髄を語り、経済学の見地からアダム＝スミス（ス密亜丹）の経済原理がもたらす分配の不公平さや階級格差を批判し、社会の痛苦を救う学説として社会主義が誕生したことを明らかにし、マルクス（麦克司）やヘンリー＝ジョージ（卓爾基亨利）の学説を積極的に評価した。

孫文は、まず社会主義が生まれた背景を次のように説く。

アダム＝スミスの経済学では、生産物の分配は、地主が一部を、資本家が一部を、労働者が一部を占め、これこそ経済学の原理に深く合致するものだという。ところがあらゆる生産は、すべて労働者の血と汗の賜物で、地主と資本家は居ながらして全額の3分の2の利益を受け取るのに、労働者が受け取るのは、3分の1の利益で<sup>(36)</sup>、そのうえ多数の労働者がこれを分けるのだから、一人一人の労働者の所得は、資本家の所得に比べて、その開きは何と大きくなることか。富裕者はいよいよ富み、貧乏なものはいよいよ貧しくなり、経済学上の階級はいよいよかけはなれ、平民の生計は、ついに資本家にことごとく奪われることになったのも当然である。これを見て、慈善家は心を痛め、救済を考え、ここに社会主義が世界に光明を放つことになったのである。

その先導を担ったのが、ロバート＝オーエン（阿渾）・フーリエ（佛利耳）・ルイ＝ブラン（ト南克）の社会主義政策であった。ついで「マルクスという人があらわれ、骨身を削って研鑽を深め、資本の問題を取り組むこと30年の長きにわたり、『資本論』という書物を著し、真理をあますところなく明らかにした。ここに体系を欠いていた学説は体系のある理論となった」と

マルクスの登場を讃える。そして貧困に喘ぐ労働者の位置を次のように明確にする。

我々は世界の総ての物産が労働者の血と汗によらないものはない。したがって労働者は、単に資本を発達させた功労者であるだけでなく、人類世界の功労者である。世界人類の功労者なのに強大な権力者に踏みにじられ、虐待されている。それだけでも我々是不公平だと思ふ。まして資本家のために功績をあげながら、逆に資本家から痛めつけられているにおいておやである。

それではなぜ光榮ある労働者が貧困に喘がねばならないのか。「実は生産の分配が不適當だということにつきる。労働者の所得はその僅かな一部だけなのに、地主と資本家の所得は逆に多くを占め、また剰余の利益を資本にして営業を押し広げ、製品はみちあふれ、売り込みを競って利を奪い、社会はその巨大な影響を受ける。だから根本的な解決をはかるために、分配から手を着けざるをえないのである」と。これに着手しようとしたのがジョージとマルクスの二人である。孫文はさらに語る。

社会主義は社会の痛苦を救う学説であるが、その希望を実行に移すには、必ず経済学の分配問題をふまえた研究をせねばならない。『進歩と貧困』を著したジョージは、世界が文明化すればするほど人類がますます貧困化するの、経済上で均分の不当なことによると考へた。土地は社会の所有であつて個人の所有ではない。生産物の分配に公平を期するならば、土地を公有にすべきと主張した。マルクスの学説は、もっぱら資本を論じ、資本もまた人が造つたものだから、当然公有にすべきだといふ。

孫文は、ジョージとマルクスの学説は表面上異なつた点もあるように見えるが、実は互いに啓発しあい、両立できるはずのものであると考へた。彼の説く社会主義とは、民生主義の基盤にジョージの学説を据え、それにマルクスの学説を重ね合わせたものである。両者の主張は公有化の対象が土地か資本かで異なるが、社会の大多数の人々の幸福をはかろうとする点では同じであつた。ここにマルクス主義の影響の一端をみることができる。

江亢虎も社会主義の諸学説を解説するなかで、マルクスの学説を紹介する。江亢虎は「社会主義はサン＝シモン（聖西門）に始まり、マルクス（馬格斯）で集大成された」<sup>(37)</sup>と述べ、社会党紹興支部の刊行雑誌『新世界』（1912年5-7月）の第2期には「社会主義大家馬爾克之学説」が、またエンゲルス『空想から科学へ社会主義の発展』の抄訳が「理想社会主義与実行社会主義」（第1、3、5、6、8期に分載、施仁栄による中国語訳）と題して掲載された。しかし当時の社会党の大多数の人々は、社会主義の諸学派の思想や相違について理解していなかつたし、サン＝シモンやフーリエあるいはマルクスやラサールが如何なる人達であるのかさえ知らないものもいた。なかには流行を追うように社会主義の空念仏を唱へるだけのものもあれば、貧富のない自由・平等な社会を幻想するだけのものもいた。江亢虎自らが回想しているように「党员は四、五〇万人いたけれども、結局社会主義を理解できていた人はどれだけいたろうか。党勢拡大の初期はただ入党を求めただけであつた。したがって社会主義という言葉が分か

る人はまだいい方であった」<sup>(38)</sup>と。

(5)

中国初期のアナキスト劉師復は、アナキズムを真の社会主義と考え、それが他の社会主義思想より優れた地位にあることを宣伝するために、孫文と江亢虎の説く社会主義の学説を厳しく批判した。劉師復は、1904年日本に留学し、翌年8月同盟会の会員となり、06年春に帰国。その後同盟会の革命蜂起が相次いで失敗し革命派が分裂の危機に瀕しているなかで、暗殺に革命の手段をもとめ、広州に潜入して07年6月、水師提督李準の爆殺を図ろうとして失敗、獄中の人となった。出獄後、10年春に支那暗殺団を組織し、將軍鳳山、摂政王載澧、内閣総理大臣袁世凱の暗殺を志向した。辛亥革命後の12年5月、広州に晦鳴学舎を創設した。これはアナキズムの宣伝と実行を目標とする中国国内最初の機関であった。パリグループ（李石曾・吳稚暉ら）の出版した『新世紀』から代表的な著作を選んで出版し、13年8月にはアナキズム宣伝の週刊雑誌として『晦鳴録』（第3号から『民声』と改称）を刊行した<sup>(39)</sup>。

劉師復は、「孫逸仙江亢虎之社会主義（1914年4月）」<sup>(40)</sup>の冒頭で「今日の中国において社会主義者といえる人は二人いる。それは孫文と江亢虎である。二人は信念をもって提唱している。それは十分に感じられるが、その言わんとするところは真の社会主義なのかどうか、我々は研究せねばならない。最近の学生たちは他人に付和雷同するものが多く、總統や党領の名に恐れをなし、是非を論ずることなく、それを社会主義の真の姿であると盲信し、それがかえって社会主義の大きな障害物となっている」<sup>(41)</sup>と述べ、孫文や江亢虎の語る社会主義は真の社会主義ではない、自らのアナキズムこそが本当の社会主義だ、と主張した。だからこそ劉師復は、孫文・江亢虎の学説が社会主義でないことを論破する必要があった。その一端を紹介する。

劉師復によれば、「孫文は、もともと政治革命家であって、社会主義の学説を専門に修めた人ではない。彼の社会主義政策は、実はヘンリー＝ジョージ（亨利佐治）の単税論に心酔し、それを中国に実現することをもとめたもの、同盟会の綱領の一つである平均地権はその産物である。ジョージの単税論は一種の社会政策であって、社会主義ではない」と。さらに社会主義には地主や資本家から土地や生産手段を取り戻し、これを公有化するという基本原則があるが、ジョージの単税論は地主の土地兼併を制限するものの、地主制そのものを否定するものではない、地主の存在を前提とした議論などは土地公有化からは程遠く、これをマルクスの学説と並挙するなどとはまったくいいかげんである<sup>(42)</sup>、という。西欧の社会主義学説の理念型を判断基準とする劉師復は、孫文が西欧近代社会で生じた弊害を回避するために、さまざまな社会主義学説の部分を取り込んで民生主義を形成し、それを社会主義だというのは、まぎれもない歪曲であり、何よりも資本と土地の公有の真の意味を知らないことからくる誤謬である、と批判せざるをえなかった。ただ劉師復の孫文批判は、孫文の社会主義認識に対する浅薄さと、社会

主義の名称をもって社会政策を語る点に集中しており、孫文の説く社会政策理論の一貫性については評価した<sup>(43)</sup>。

一方江亢虎の学説に対して、劉師復は厳しい批判を投げかける。まず彼の創設した社会党が、その綱領から社会党の名を冠するに値しないこと、共産主義を優れた思想といいながらそれを否定し、その後社会主義の諸学説を一律に否定するにいたったのは、彼が共産主義や社会主義の意義や定義を全く理解していないこと、彼の主張は私有財産制を前提としたもので、生産手段の公有化をいわない点において社会主義と共通するものがないこと、理論的にも行動的にも一貫性がなく支離滅裂であり、孫文学説に比してかなり見劣りすることなどを挙げ、江亢虎の所説は社会政策であって、社会主義の精神から大きく逸脱したものである、と論断した<sup>(44)</sup>。

劉師復は、「孫逸仙江亢虎之社会主義（1914年4月）」「駁江亢虎（1914年6月）」「答樂無（1914年7月）」<sup>(45)</sup>のなかで、無政府共産主義が真の社会主義であるという立場で自らの正当性を、時にはマルクス主義や『共産党宣言』の十大綱領、第一インターナショナルの歴史を繙きながら語る。彼によれば、社会主義は集産主義と共産主義の二つの潮流に大別される。両者の違いは、前者が生産手段のみを共有とし、人々は国家あるいは社会からの労働の多寡によって生産物を分配されるのに対して、後者は生産手段および生産物を共有し、人々はその能力に応じて労働し、必要に応じて生産物をとる。両者はともに、社会主義の基本原則の実現にむけて、現存の社会組織を根本から覆し、資本家の手から生産手段を取り戻すという点で共通している。しかし両者を比較すれば共産主義が優っている。集産主義は私有権の残存と分配物の不平等さゆえに不完全な社会主義である。このような理解のもとに、劉師復はマルクス（馬格斯）を集産派の祖（いわゆる科学的社会主義の創始者）ととらえ、社会主義はマルクス以後において、アナキズムはクロポトキン（克魯泡特金）以後において、科学的な精神を具有するにいたった、と論評した。

清末と同様に、民国初年においても上述のように社会主義に関するさまざまな学説が紹介され論じられた。しかしそのなかであってマルクスの学説を専門的かつ体系的に紹介し論評したものはない。多くは社会主義の諸学説を論ずるなかでマルクス主義にふれたにすぎなかった。

## （6）

袁世凱が大総統となって独裁を志向し、革命派をはじめ進歩的な知識人に対する圧迫と排除が強化されていくなかで、社会主義を論ずる熱気がしだいに冷めていった。袁世凱は、1913年3月国民党の指導者宋教仁を暗殺させ、8月には江亢虎の社会党を解散させ、また劉師復の晦鳴学舎も封閉された。さらに袁世凱の帝制復活の動きに呼応して、思想文化の領域でも復古主義の逆流が巻き起こった。この暗黒の潮流に対抗して、後の中国共産党創設にかかわる陳独秀は、1915年9月上海で『青年雑誌』（第2巻より『新青年』と改称）を刊行し、新鮮活発の青

年たちが自覚して奮闘することに期待をかけた。陳独秀らは西欧の近代をモデルに「民主と科学」<sup>デモクラシーサイエンス</sup>を標榜して、旧い封建道徳である儒教倫理を鋭く批判した。いわゆる新文化運動である。当時の刊行物において社会主義やマルクス主義を専論で語るものは少なかった。『新青年』第1巻第2号(1915年10月15日)に「法蘭西人与近世文明」を書いた陳独秀は、マルクスが社会主義の学説を発展させて光り輝くものにしたことを紹介したが、当時の彼にあって社会主義やマルクス主義を宣伝する意義をまだ感じとてはいなかった。そのことは、第2巻第5号(1916年1月1日)誌上の「通信欄」において「社会主義を救世の良薬としてこれを宣揚することをとめた」愛読者の質問に、陳独秀が「社会主義は理想がはなはだ高く、その学派もはなはだ複雑である。ただこの学説の流行は、中国では欧州より緩慢になるであろう。なぜなら産業がまだ興っていないから」と答えたことにも表されている。

辛亥革命前後の中国社会に、マルクス主義が残した痕跡や影響はわずかでしかなかった。マルクス主義の学説が本格的に体系として中国に伝播し受容され、大きな影響を及ぼしたのは、ロシア十一月革命後のことである。1917年、レーニンとボルシェヴィキの指導のもとで、ロシア十一月社会主義革命が偉大な勝利をおさめ、社会主義の掲げる崇高な理想が地球の一角、ユーラシア大陸の一つの大国で実現した。それは中国の先進的な知識人たちに大きな勇気と行動力を与え、それが開花したのは五四運動につづく激動の1920年代においてであった。

〔注〕

- (1) 例えば中国人留日学生の雑誌『浙江潮』第2期、第6期の「新名詞解釈」欄で、社会(Society)・国家(State)・帝国主義(Imperialism)・孟魯主義(Monroe-Doctrine)を詳細に解説している。
- (2) 小論の前提として拙稿「湖南への社会主義思想伝播に関する一考察」(『佛教大学総合研究所紀要』第3号、1996)、蔣俊他『中国近代的無政府主義思潮』(山東人民出版社、1990)、胡永欽他「馬克思恩格斯著作在中国伝播の歴史概述」(『馬克思恩格斯著作在中国伝播』(人民出版社、1983)等を参照のこと。
- (3) 清末の中国で英米の宣教師たちがキリスト教の宣伝・普及を中心に、さらに中国内外の社会的に重要な記事や教育・思想・科学についての論考・翻訳等を掲載し、変法運動大きな影響を与えた雑誌。創始者はアメリカ人宣教師ヤング＝ジョン＝アレン(林樂知)で、1868年9月に創刊、当初『中国教会新報』(週刊、第1-300巻)と称してキリスト教の宣伝を主体としたが、販路が伸びず、1874年9月に『万国公報』(週刊、第301-750巻)と改題し、内容も内外の時事問題を中心とする総合雑誌へと転換した。1883年8月から5年余り休刊したのち、上海広学会の機関誌として1889年2月に復刊の第1冊(月刊)が刊行され、1908年末の廃刊まで続いた。
- (4) 李天綱編校『万国公報文選』(〈中国近代学術名著叢書〉三聯書店、香港、1998)所収の『大同学』今世景象・相争相進之里より。
- (5) 夏良才「也談早期中文刊物中有關《資本論》和馬克思記名的記載」(『近代史研究』1979年2期)、楊国昌「談談〈資本論〉在中国的伝播」(『經濟研究』1979年5期)。
- (6) この連載はまとめられて、1899年5月に上海広学会より単行本(訳本)として出版される。日本では1899年2月に角田柳作訳『社会の進化』と題して開拓社から出版された。これより先外山正一が1896年4月の哲学会の講演においてキッドの社会進化論に言及し、またそれが同年8月刊行の『哲学雑誌』11巻114号に論説として掲載された。

- (7) 『飲冰室合集』（中華書局、1989）文集之十二／『新民叢報』18号（1902年10月16日）。
- (8) 同前、文集之十四／同前40・41号（1903年11月2日）—42・43号（1903年12月2日）。
- (9) 同前、専集之二／同前46・47・48号（1904年2月14日）。
- (10) 広智書局は、保皇派が海外華僑から集めた資本金10万円で、1901年春に上海に創辦され、梁啓超の主持のもとに訳書等を刊行し、当時の知識人に大きな影響を与えた（丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983、730頁）。
- (11) 張静廬輯註『中国近代出版史料初編』（群聯出版社、1953）173-174頁。
- (12) 福井準造『近世社会主義』の中国語訳の抄訳は、姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』〈中国近現代思想文化史史料叢書〉復旦大学出版社、1984）に収録されている。
- (13) 張静廬輯註『中国近代出版史料（二編）』（群聯出版社、1954）429頁。
- (14) 『新民叢報』第79号（1906年4月24日）「答某報第四号对于本報之駁論」、『新民叢報』第82号（1906年7月6日）「暴動与外国干涉」、『新民叢報』第84、85、86号（1906年8月4日、20日、9月3日）「雜答某報」、『新民叢報』第86号（1906年9月3日）「中国不亡（再答某報第十号对于本報之駁論）」、『新民叢報』第90、91、92号（1906年11月6日、16日、30日）「再駁某報之土地国有論」等による。
- (15) 『宋慶齡選集』下（人民出版社、1992）487頁。
- (16) 『民報』第10号（1906年12月20日）「紀12月2日本報紀元節慶祝大会事及演説」。
- (17) 『民報』第4号（1906年5月1日）馮自由「録中国日報民生主義与中国政治革命之前途」朱執信「從社会主義論鐵道国有及中国鐵道之官辦私辦」。
- (18) 『民報』第4号「欧美社会革命運動之種類及評論」（民報社員訳、宮崎民蔵稿）。
- (19) 共産党宣言の本邦初訳は、『平民新聞』第53号（1904年11月13日）掲載の幸徳秋水・堺利彦共訳で、第3章を除く部分訳、その後『社会主義研究』第1号（1906年3月15日）に全文が訳出される。朱執信の抄訳が何によったかは不明である。
- (20) 『社会主義研究』第1号（1906年3月15日）掲載の全訳から重訳。
- (21) 『天義』第6巻「欧洲社会主義与無政府主義異同考」。
- (22) 『民立報』1911年12月30日「歡迎孫中山先生記」、『孫中山全集』第2巻（中華書局、1982）「在南京同盟会會員餞別会的演説（1912年4月1日）」。
- (23) 孫文の民生主義と社会主義の関係については狭間直樹『中国社会主義の黎明』（岩波書店、1976年）120-140頁参照。
- (24) 『民立報』1912年1月1日「大總統与社会党」。
- (25) 江亢虎『洪水集』「中国社会党宣言（辛亥九月）」「中国社会党歡迎孫中山君（辛亥11月）」、朱建華・宋春主編『中国近現代政党史』（黒竜江人民出版社、1984）91-92頁、朱建華主編『中国近代政党史』（吉林大学出版社、1990）249-250頁）。
- (26) 『孫中山全集』第2巻「在上海中国社会党的演説（1912年10月14日至16日）」507頁。
- (27) 『孫中山全集』第2巻「在武昌十三团体聯合会歡迎会的演説（1912年4月10日）」「在上海南京路同盟会機關的演説（1912年4月16日）」「在上海中華実業聯合会歡迎会的演説（1912年4月17日）」「在広州報界歡迎会的演説（1912年5月4日）」「在国民党成立大会上的演説（1912年8月25日）」「在山西同盟会歡迎会的演説（1912年9月19日）」「在上海中国社会党的演説（1912年10月14日至16日）」など。
- (28) この講演タイトルは後の編集者によって名付けられたもの。『孫中山全集』第2巻（中華書局、1982）「在南京同盟会會員餞別会的演説（1912年4月1日）」。
- (29) 中華民国史資料叢稿『孫中山年譜』（中華書局、1980）143頁。『孫中山全集』第2巻「中国革命的意義」「中国的下一步」324-329頁。
- (30) ヴィ・イ・レーニン／川内唯彦訳『民族問題にかんする批判的覚書等』〈国民文庫〉（大月書店、1953）所収参照。
- (31) 同前、135頁、138頁。

- (32) 『孫中山全集』第2巻「在上海南京路同盟会機関的演説(1912年4月16日)」339頁。
- (33) 中国同盟会の「革命方略」のなかの「軍政府宣言」の四綱の第4項目「地権を平均する」では、「文明の福祉は国民が平等に享受する。社会経済組織を改良し、全国の地価を確定すべきである。現在の地価は、そのまま現所有者のものとするが、革命後の社会の改良進歩によって増加した分は国家に帰属させ、国民が共同で享受する」と説明する。
- (34) 波多野善大「初期における孫文の『平均地権』について」(『社会経済史学』21巻5・6号、1956)、久保田文次「孫文の地権平均」(『歴史学研究』487号、1980)、伊原沢周「日中両国におけるヘンリー・ジョージの思想の受容」(『史林』67巻5号、1984)、中村哲夫『孫文の経済学説試論』(法律文化社、1999)参照。
- (35) 孫文資料の整理のなかでは「社会主義之派別及方法」と題されている。『孫中山全集』第2巻「在上海中国社会的演説(1912年10月14日至16日)」506-524頁。
- (36) アダム・スミスはその著『諸国民の富』のなかで、孫文の批判するような利益三分法を論じてはいない。中村、前掲書参照。
- (37) 『師復文存』<1927年初版>(『国民叢書』第3編86、上海書店所収)「駁江亢虎」2頁。
- (38) 『江亢虎講演録』第1集(南方大学出版社、1923)「社会主義之今昔」49-50頁。
- (39) 嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』(研文出版、1994)「第7章革命の求道者—劉師復」、同『中国黒色革命論—師復とその思想』(社会評論社、2001)参照。
- (40) 前掲『師復文存』21-32頁、『民声』第6号所収。劉師復は、クロボトキンの無政府共産主義理論を思想的基盤とし、革命の手段としてサンディカリズムを提唱した。この両者の結合が彼のアナキズムの特徴の一つである。革命の達成にむけて労働者の組織化を主張したが現実の中国においては、知識人にアナキズムの真理を宣伝し、その後労働者に伝播するという形をとって進められた。ある意味で中国の伝統的発想といえる。
- (41) 前掲『師復文存』21頁。
- (42) 同前、24-26頁。
- (43) それゆえに劉師復は、孫文の理論を次元を全く異にするものとみなし、その後孫文批判を展開していない。同前、25-27頁、前掲『近代中国アナキズムの研究』「第7章革命の求道者—劉師復」、前掲『中国黒色革命論—師復とその思想』参照。
- (44) 前掲『師復文存』27-31頁。
- (45) 同前所収。

(しみず みのる 人文学科)

2007年10月17日受理